大 水 崎 遺 跡

― 串本町総合運動公園建設に伴う発掘調査概報 ―

１９９１年３月

財団法人　和歌山県文化財センター

序

当センターは、平成２年度事業の一つとして、串本町総合運動公園建設に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査事業を串本町から受託し、実施して参りました。

調査の対象は、縄文時代の遺跡として県下でも著名な大水崎遺跡です。本遺跡は、昭和27年に県教育委員会が発掘調査を実施して以来、その重要性が指摘されていましたが、今一つ遺跡の性格などに不明な点も多く、その後の調査が待たれていました。今回の調査は、気象観測史上希にみる四度にわたる台風直撃に見舞われ、海岸砂丘の遺跡としては風前の灯でありました。しかしながら、辛うじて調査を続行することができ、その結果、縄文時代、平安時代後期を中心とした遺構・遺物が明らかになり、その他、弥生時代末から平安時代の遺物なども発見され、非常に貴重な資料を得ることができました。

ここに取敢えず不十分ではありますが、調査成果の概要をまとめ刊行する次第であります。本書が当地方の歴史を知るうえで一つの資料となれば幸甚です。

最後になりましたが、調査にあたり種々御協力いただいた関係各位、並びに地元の皆様に深く感謝の意を表し厚くお礼申し上げます。

平成３年３月

財団法人和歌山県文化財センター

理事長　仮　谷　志　良

例　言

1．本書は、串本町総合運動公園建設に伴う大水崎（おおみさき）遺跡の発掘調査概報である。

2．調査は、串本町の委託事業として、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

3．調査対象地は、和歌山県西牟婁郡串本町鬮野川1169-1他である。

4．調査面積は、県教育委員会が平成元年度に実施した確認調査にもとづき約966㎡とした。

5．調査は、調査委員会・県教育委員会の指導のもとに、文化財センター永光 寛（主査）が担当し、中林都志が補佐した。他に、辻林 浩（埋蔵文化財課長）・村田 弘・井石好裕（技師）に応援を得た。

6．出土遺物のうち縄文土器に関しては、奈良大学の泉 拓良氏の指導・助言を得た。

7．調査にあたっては、伊勢田進・塩崎勝之・中村久雄各氏をはじめ地元の方々に助言を得た。
また、串本町役場・町開発公社・町教育委員会には、多大な御配慮をうけた。

8．調査中、９月の多雨に加え、４度の台風直撃を受け、調査地内冠水による被害をうけた。
特に１・２区土壙内の礫石が実測前に崩壊したのは惜しまれる。

9．本書で使用した遺構の記号は、掘立柱建物跡（ＳＢ）、溝（ＳＤ）、土壙（ＳＫ）、小穴（ＳＰ）である。

10．遺物はすべて通し番号で表示し、本文・実測図・写真の遺物番号は共通する。ただし、実測図のみの遺物には200番台の番号を与えた。

11．本遺跡の調査例は、昭和27年３月に県教育委員会が、平成元年９月に同じく県教育委員会が本事業に関する確認調査をそれぞれ実施している。

目　次

1．位置と環境 …… 1
2．発掘調査 …… 1
(1) 調査方法 …… 1
(2) 基本土層 …… 2
(3) 遺　構 …… 2
(4) 遺　物 …… 4
(5) ま と め …… 5

図 1 …… 位置図・調査地点
2～3 …… 遺構全体図・土層図
4～5 …… 遺物実測図（縄文土器）
6 …… 遺物実測図（その他）
図版 1 …… 遺構写真
2～9 …… 遺物写真（縄文土器）
10 …… 遺物写真（石器）

1. 位置と環境

地形的環境 本遺跡は、紀伊半島の南端、紀伊大島を東に望む海岸砂丘（砂嘴）上に位置する。ＪＲ串本駅の北東約300ｍの地点、紀勢本線に沿ったところである。砂丘は、海岸線に接した丘陵地帯の一部が途切れ入江状に内湾し、その湾頭を一文字に塞ぐように形成されている。内湾した丘陵部からは、山襞を縫うように小谷数条が流れ、合流して大水崎川となり砂丘部を大きく迂回、砂丘南西端をかすめて海に流出している。現在では、砂丘の前面が埋め立てられ、かつての海岸砂丘の景観とは異質なものになっているが、後背側には沼田として湿地帯が残されている。砂丘部の規模は、全長約210ｍ、幅80ｍ前後と考えられ、稜線は砂丘長軸に並行しやや後背側にある。標高は、地表面最高所で約4.5ｍ、湿地帯が約3.1ｍである。

周辺の遺跡 現在、分布調査・発掘調査などで判明している遺跡の分布は位置図の通り14箇所にのぼる。これに単純・複合遺跡をまじえて各遺跡を時代別にみると、縄文時代が10箇所（１・３・４・７・８・10～14)、弥生時代が５箇所（１・３・６・７・９)、古墳の可能性をもつ（６）を含め古墳時代が５箇所（１・２・４・７)、そのほか奈良あるいは平安時代が３箇所（１・５・７）となり、縄文時代の遺跡が多数の割合を占めている。これら遺跡の分布は次ぎの４地域に分けることができる。つまり①串本側、②潮岬台地、それらを繋ぐ③砂洲上、および④紀伊大島である。①は、（１～６）の遺跡が、②は（８・９）の遺跡が、③は（７）が、④は（10～14）の遺跡がそれぞれ分布する。この状況から、①③の平野部に弥生時代以降の遺跡が、台地や島の②④に縄文時代遺跡が多く立地していることが指摘できる。また観点を変えれば、①②③と④が対峙する海峡に面している様子も窺うことができる。

2. 発掘調査

(1) 調査方法

今回の調査地点は、砂丘部の後背側から稜線にかけて全長約90ｍの調査範囲である。現況は、畑地２箇所と製材所敷地１箇所となっている。

調査の方法は、まず調査進行上の便宜を図るため、大・小の地区設定を行った。大地区は、上記のごとく３分割された土地の区画を利用した。すなわち、１区は砂丘後背地に接した畑地。２区は砂丘後背側から稜線部にかかる畑地で客土を施した地域、調査地最高所にあたる。３区は稜線部にあたるが２区より低く、とくに南西部分は漸次下降し砂丘地先端部の様相を呈している。南西端はもと製材所の敷地で、工場が建ちその敷地には客土による角礫が目立つ。次ぎに小地区の設定は、道路工事計画上のセンターラインに設けられた中心杭（№１～№２）を利用し、４メートル方眼の地区設定を行った。なお、真北と方眼北との関係はＮ－32° 32′ －Ｅである。

(2) 基本土層

調査区長軸に沿い地区ごとに見ていくことにする。比較的残りのよい1区東壁では、上から第1層が畑の耕作土、第2層は土師器・須恵器片を包含する黒褐色砂（含土分)、第3層は縄文土器片を包含する暗茶褐色砂（含小礫)、第4層は無遺物層淡灰褐色砂の層序をもつ。2区南東壁では、第1層が客土・耕作土、第2層は土師器・須恵器片を包含する黒茶褐色砂、第3層は水害に伴う砂礫層、第4層は縄文土器片を包含する暗褐色砂、第5層は灰褐色砂の無遺物層となる。3区は大半が砂抜取り坑による攪乱を受け、また2区第3層の水害に伴う堆積が顕著である。南西端では、畑の耕作土がみられず製材所稼働時の客土（角礫）が厚く、第2層は暗茶褐色砂（粗)、第3層茶褐色砂（粗)、第4層砂礫層（無土分)、第5層灰茶褐色砂（無土分）となっている。概略できることは、第1・2区は各時代を通じて安定を示しているのに比べ、第3区の半分を占める南西部、つまり砂丘先端部では土分を含まないしまりのない粗い砂で構成され、また水害を被るなど不安定な要素が見られる。

(3) 遺　構

検出した遺構は、掘立柱建物跡（SB）1棟、溝（SD）1条、土壙（SK）71基、ピット（SP）24穴である。このうち、13穴のピットは柱穴としてSB1に対応する。

掘立柱建物跡（SB1）は、2区後背側に位置する。桁行3間（あるいは3間以上)、梁行3間の総柱で、棟方向はN－70°－Wとなる。このうち13穴の柱穴を確認する。面積は、5.0m×5.7mで約28.5㎡もしくはそれ以上である。柱穴からは、8～9世紀にかかると考えられる製塩土器の体部片が出土している。建物の時期は、この地区に中近世の遺物が見当らないことなどを考えると、製塩土器の時期と大きく異なるとは考えられず、したがって奈良・平安時代のある時期と考えておきたい。

溝（SD1）は、1区と2区の境界上に位置する。確認全長約8.34m、幅約2.40m、深さ約0.95m。出土遺物は黒色土器片、製塩土器片、土師器片、須恵器片、縄文土器片、有溝土錘、石錘、不明石器、軽石。溝の断面は、底付近の壁がほぼ垂直に立上り変換点をもって外上方に開く。この溝は、砂丘長軸に直交し、一方は後背地に流れ、他方は調査区外へ延び全容が不明である。この溝の開始時期は、黒色土器・製塩土器を確認しているところから、前記の掘立柱建物跡と相前後する時期と考える。溝の性格は、一般的に排水機能あるいは土地利用上の区画などが考えられるが、本遺跡が排水機能の高い砂丘上に立地していることを勘案すれば、ここでは後者の機能を指摘しておきたい。

土壙・墓（SK）は、1区で11基、2区で29基、3区北東部で30基、3区南西部では1基を検出し総計71基となる。このうち55基は攪乱あるいは遺構が重複しており、したがって全容の判明するものは16基である。

分布状況は、1区が後背湿地際に位置するのに反し、2・3区は後背湿地際より少し内側に入った稜線付近に分布する傾向をもつ。仮に前者を土壙群A、後者を土壙群Bとしておく。ただし土壙群Aは2区にも同じ傾向がみられる。

形態的な特徴は、平面の形状を楕円形あるいは円形を呈するものが多く、隅丸方形もみられるが少ない。断面の形状は、①底面より緩やかに弧を描きながら外上方に立ち上がる壁面をもつもの（舟底状）で、大半がこの形状に属す。②底面を二段掘りにつくるもの（SK04・11）。③底面に平坦部をもち、やや外に開き気味に立ち上がる壁面をもつもの（SK69・70）で、平面形を隅丸矩形とする。④底面が階段状に下降するもの（SK54・65）で、平面形を隅丸矩形とする。⑤底面にピットをもつもの（SK70）に分かれる。①は全般的にみられるものであるが、②は土壙群Ａのみで、③④⑤は土壙群Ｂに帰属する。ただし③④⑤は土壙群Ｂの中でも特異な形態をもち性格を異にするものと考える。

土壙の規模を全容が判明する16基でみれば、最大規模のもので長軸を約2.45m、短軸を約1.80m。最小のもので長軸約0.65m、短軸で約0.65mを測る。長軸でみれば0.5m～1.0mおよび1.5m以上が大半を占める。

土壙内には土器・石器遺物のほかに拳大以上（～65cm大）の円礫・角礫および板状の石を認めるものが38基に達する。このうち５点以上含むものが13基確認できる。特異なものは、土壙内に20cm大前後の板状の石を樹立させてあるもの２例（SK27・33）、そのうちSK27は土壙両端に樹立させている。また底面より浮いた状態で水平に置いている（SK44）ものなどもある。それらはいずれも土壙群Ｂに属する。総体的に見れば、土壙群Ａに礫の検出が顕著である（図版１－３・４）。これらの礫および石材は、調査地点の表層（弥生時代中期以前の水害に伴い10～15cm大の礫が見られはするが）には見られず、摩耗度の低い板状の石（15～60cm大）および周辺に産出しない石英粗面岩などの礫石を含み明らかに搬入したものと考えられる。

土壙内の遺物は土器および石器が出土している。土器は59基の土壙から出土している。内訳は、縄文土器（中･後期）のみが51基、平安時代以前の土師器・須恵器が７基（SK04・05・06・07・10・18・68）、のこる１基は江戸時代の灯明皿（SK71）を出土している。SK71を除きすべて破片である。石器に関しては、石斧・石錘・敲石・石鏃・投弾などが20基から出土している。この中で、SK64には完形の石斧が１点、片面に打ち欠きが認められる石斧未製品２点、石斧形状の礫石２点が土壙端部に同一平面で２列に並べられ、加えてもう１点の石斧形状礫石がそれらに接して下位に埋置されていた。土壙墓に石斧が供献されている類例は確認されているが、単なる供献とは考えにくく石斧の製作工程をあらわしているであろうか、他に類例を見ない。

これら71基の土壙の造営時期は、層位・出土遺物から考えると70基が縄文中・後期と平安時代に大きく分けられ、SK01～SK70は、縄文土器のみを出土する土壙が51基、遺物を含まないものが12基となる。遺構の重複関係で土師器・須恵器同時期もしくは以降とするものが10基、縄文後期の包含層下位で検出したもの10基となる、ほかに縄文時代の石斧を埋置したものが１基。したがって、ほぼ時期を決定できるものは、出土遺物の時期範囲から、縄文前期末から後期にかかる土壙が11基、平安時代が17基となる。これを土壙群別にみれば、土壙群Ａは、平安時代が16基。土壙群Ｂは、縄文中期を中心とした土壙が11基となり縄文土器片（縄文中・後期）のみを出土する土壙の大半がこのグループの範疇に含まれる。言

い替えれば土壙群Ａつまり平安時代に形成された土壙群は、１区の後背湿地への落ち際に並行して営まれ、かつSB１、SD１の所見と併せ考えれば、この３者はSD１を区画の溝として併存していたことが推察できる。２区３区に広がる土壙群Ｂは、プランの異なる土坑は別として、土壙群Ａほどの明解さはないが、層序・出土遺物を検討すればほぼ縄文中・後期を中心とした土壙群として営まれていたと理解することができる。

さて、長期間にわたる土壙の性格であるが、まとめてみると①平面の形状が楕円形状を基本とする。②断面形状を舟底状とする。③土壙上および埋土中に礫がみられる。④土壙の両端に板石を樹立させ配石墓的要素が見られる。⑤埋土中に骨片を含む例がある、などである。このような特徴もつ土壙は、④、⑤の特徴から墓地の可能性が指摘でき、また近年の紀南地方の調査例で増加している海岸砂丘墓（縄文時代～平安時代・約300基）の形態的特徴とくに①、②、③はよく合致している。したがって、本遺跡の土壙は、形態の異なる５例を別として、明確ではないにしても、土壙群Ａは平安時代の墓地、土壙群Ｂは縄文時代の墓地としてその性格を与えることができる。

(4) 遺　　物

出土遺物は、全出土量の約９割が縄文時代のもので、残りが弥生時代後期後半から平安時代にかけてのものである。ただし、中世以降の遺物も、極微量の山茶椀片と江戸時代の灯明皿が出土している。

分布の状況は、まず縄文時代の遺物が１区から３区まで分布しており、とくに２・３区北東部に多い。弥生時代後期から平安時代にかけての遺物は、ほぼ全般的に分布を確認するが、１区により濃厚な分布を示している。

縄文土器　小破片で不明瞭ではあるが前期末の大歳山式（１）を最古とし、後期中葉の一乗寺Ｋ式（83～85）で途絶える。

中期の土器（２～39）は、深鉢を主体とする。西日本の系統をもつ船元・里木式をベースに、北陸系の新崎式（33他）、東日本の五領ヶ台式（26他）、東海系（７他）などが割合を占め、また勝坂１式かと考えられる中部高地系の土器（28）なども出土している。（30）は包含層出土の深鉢である。北陸系の影響下にあると考えられる。黒褐色の色調をおび胎土に雲母片がまじる。口縁部は波状を呈し２個所の波頂部をもつ。半截竹管による半隆起線文を特徴とする。

後期（40～97）は、深鉢を主体とし、浅鉢・注口土器などが見られる。磨消縄文の中津式（40他）・福田ＫⅡ式（49他）、四ッ池式（58他）以後の縁帯文土器の北白川上層式（63他）および併行関係にある堀之内式（72他）などである。

出土量は、縁帯文土器の時期が最多量で、次ぎに中期の半截竹管を多用した土器、磨消縄文を施した土器の順である。これらの土器は、土壙などの遺構の中にもみられるが、大半は第４層の暗褐色系砂層に包含されている。

弥生土器　手焙形土器（201）と甕底部少量である。201は、３区の南西端付近の近世土師器を含む攪乱

坑出土。背面（蔽部）及び体部下半に叩き目痕をもち、器壁の薄い土器である。

製塩土器 調査区全域に希薄ながらも約50片の分布がみられる。いずれも小破片で、形態の明確なものは出土していないが口縁部・体部・底部の破片から、瀬戸遺跡（白浜町）をはじめ県内では一般的な丸底筒形のプロポーションをもち、８世紀後半から９世紀前半に比定できる。

土錘 管状土錘６点、有溝土錘10点の２種類が出土している。有溝土錘の完形品６点で重量を計測すると40ｇ～176ｇになる。SD－01出土の有溝土錘１点を除き他は包含層出土である。

石器 石鏃７点（103～109他）、削器７点（112他）、楔形石器１点（113）、石匙２点（116・117）、石斧10点（121～124）、ミニチュワ型石斧１点（111）、敲石55点（125）、投弾12点、石錘32点（118～120）などがあり、サヌカイトの大型剥片（10cm大）も出土している。石器の大半が包含層にみられるが、特異な例としてSK－64出土の石斧（図版１－10）をあげることができる。石斧は６点（121・124）であるが完成品はその内１点で、片面に打ち欠きが認められるもの２点、石斧の形状をなすが未加工であるもの３点である。完形品（121）は、刃部のみを研ぎだした刃部磨製石斧で、刃縁に対し斜にはしる使用痕が基部両面に見られ、それに伴い刃縁に片減りがみられる。砂岩製。長さ15.0cm、幅7.5cm、厚さ3.0cmを計測する。ミニチュワ型石斧（111）は、砂岩製で長さ4.9cm、幅1.9cm、厚さ0.77cmを計測する。刃部・基部（主面・側面・基端）を研ぎだし、基部の主面と側面の界は面取りが施されている。

そのほか、土師器（高杯・杯・椀・甕）、黒色土器（椀）、須恵器（杯他）、緑釉陶器（椀）、近世土師器（灯明皿）などが出土している。これらの遺物は、４世紀代が欠落し、５～10世紀にかけてのもので、量的には平安時代が多くなっている。

(5) ま と め

上記のことを総合して考えると、縄文海進以後に形成されたと考えられる砂丘は、縄文時代前期末からなんらかの形で利用が始まり、狩猟・漁撈生活の一端を窺わせ、かつ墓地としての場をも供したと考えられる。また、中期の土器に見られるように基盤を近畿・瀬戸内としながらも、関東・中部・東海・北陸系の文様形態をもつものが多く、直接的でないにしろある程度広範囲な交流を営んでいたことが考えられる。この状況は、一旦中期後葉に途絶えるが、後期初頭から再び活況を呈するようになり中葉まで続けられる。ただし、近畿・瀬戸内が主流となる。その後、縄文後期後葉から弥生後期前葉まで、この砂丘は放棄されたのであろうか空白期を迎える。この空白の間には、津波であろうか砂丘南西部に水害の痕跡が見られる。弥生後期後葉以降は、奈良時代まで僅かながらも遺物を確認することができる。奈良時代後半から平安時代にかけては、製塩土器の出現と相俟って小ピークをむかえる。この期は、溝で画された土壙・掘立柱建物跡がほぼ同時期に存在した可能性が指摘できる。また、主に焼塩工程用と考えられている製塩土器の出土は、本遺跡が海岸線に立脚していること、かつ他の遺物に比べ量的に割合を占める点を考慮すると、単に内陸部出土の製塩土器と同一には扱えず、したがって、製塩遺跡としての性格の一面が指摘できる。また、前記の掘立柱建物跡は、こうした生産の場に利用された倉庫跡の

可能性も指摘できる。土錘の出土は、時期の決定に不明確さが残るものの、漁撈も併せて営まれていたことを示唆するものであり、したがって、多目的な砂丘利用が考えられる。ただし、縄文時代と同様に集落としての遺構は明らかとはなっていない。むしろ遺物の量から考えて本砂丘以外に求められる可能性がたかいと考えられる。

このように今回の調査は、過去2度の調査では得られなかった数多くの遺構・遺物を確認し、遺跡のもつ性格を多少なりとも明らかにできたことは非常に大きな成果であった。

本遺跡は、縄文土器に見られる他地域との交流関係、集団墓、塩生産の問題、砂丘集落立地の問題、縄文時代の集落移動を含めた周辺遺跡との関係など様々な問題を提起する非常に重要な遺跡である。それ故、今回の調査を充分に活かすためにも遺物の整理の計画が急がれ、同時に砂丘および周辺地の開発計画の増加を考えると、砂丘上に展開する大水崎遺跡の範囲確認調査を含め全面的な発掘調査は必要かつ不可欠なことといえる。

【参考文献】

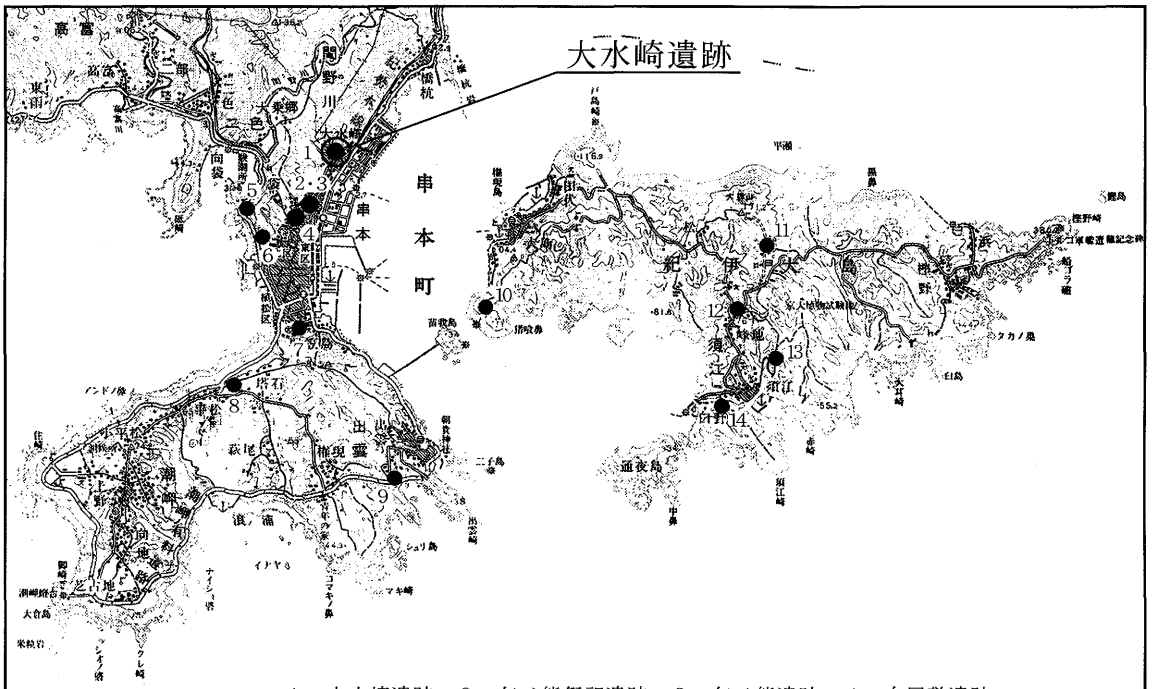
『紀伊考古図録』和歌山県教育委員会　1955.

『和歌山県下の縄文式文化大観』（古代学研究第18号）巽三郎・羯磨正信　1958.

『串本町史』（史料編）　串本町　1988.

『和歌山県北山村下尾井遺跡』北山村遺跡調査会　1979.

図 1



大水崎遺跡位置図および発掘調査地点

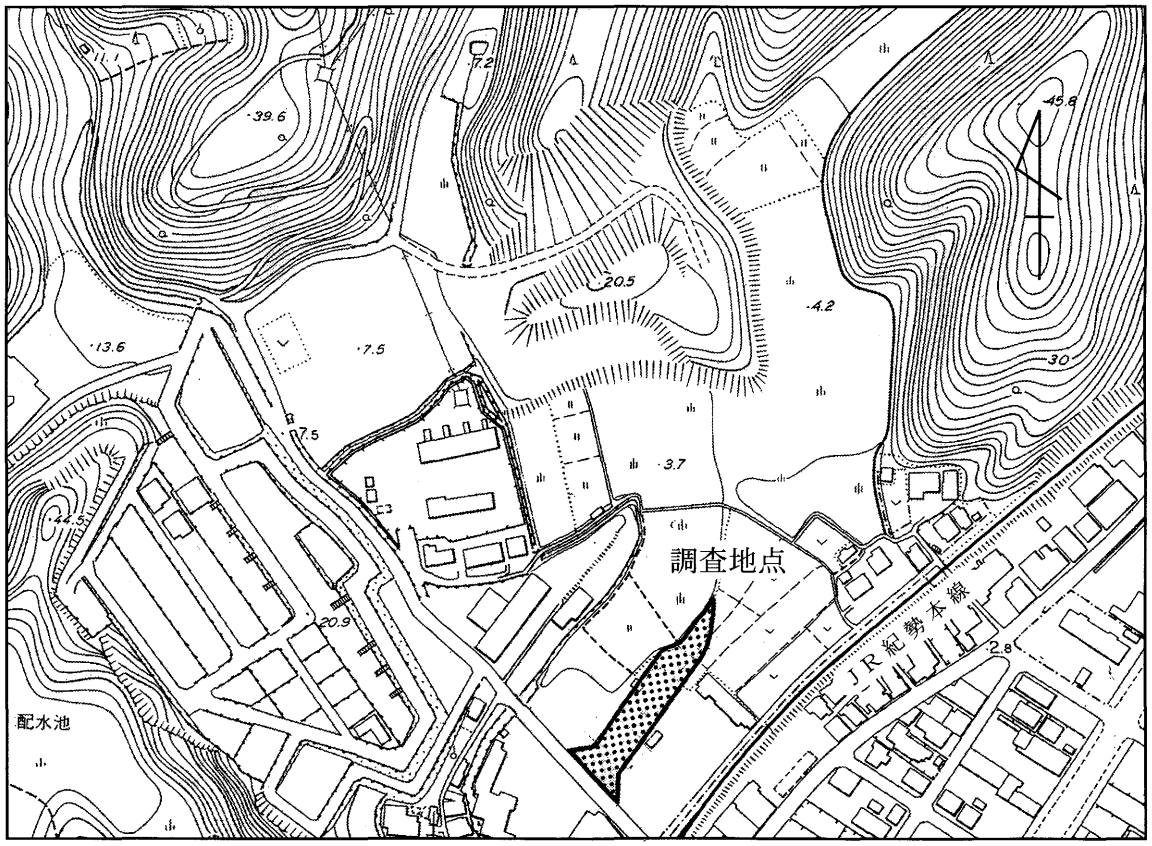
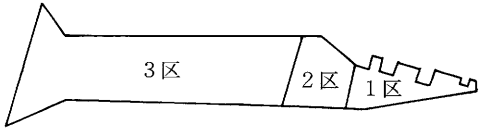
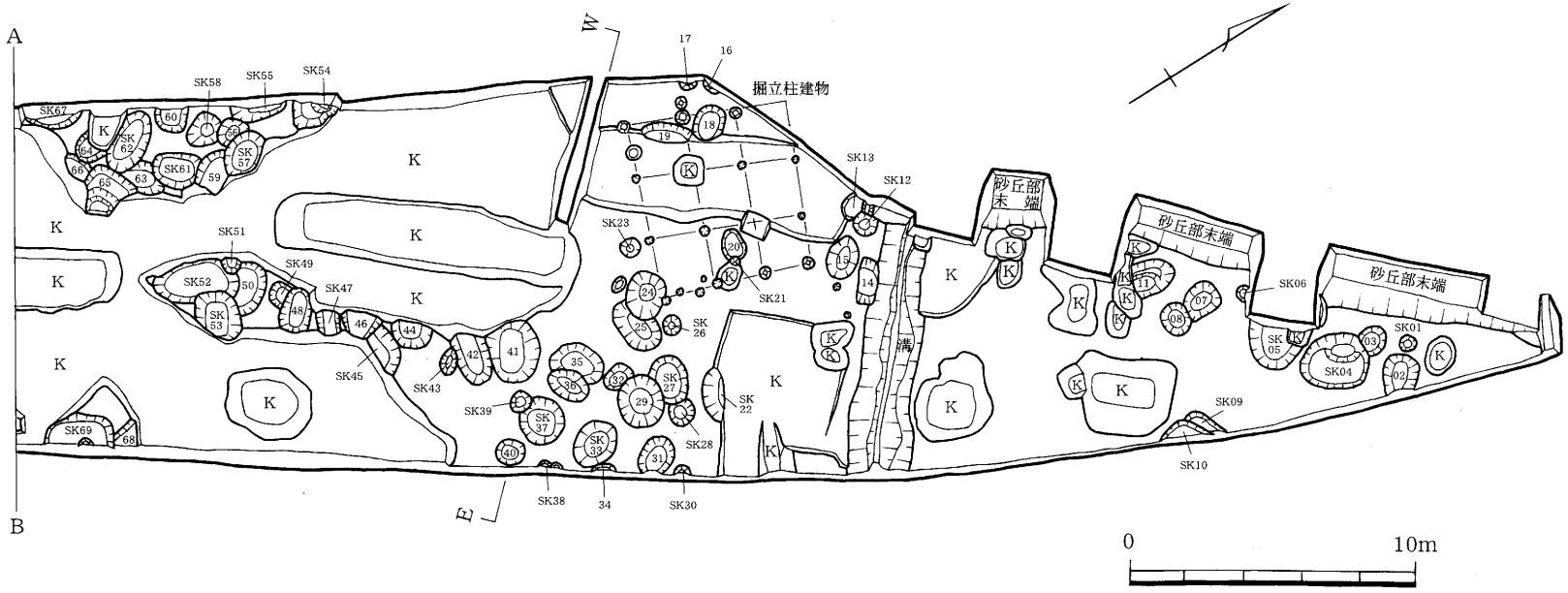


図2

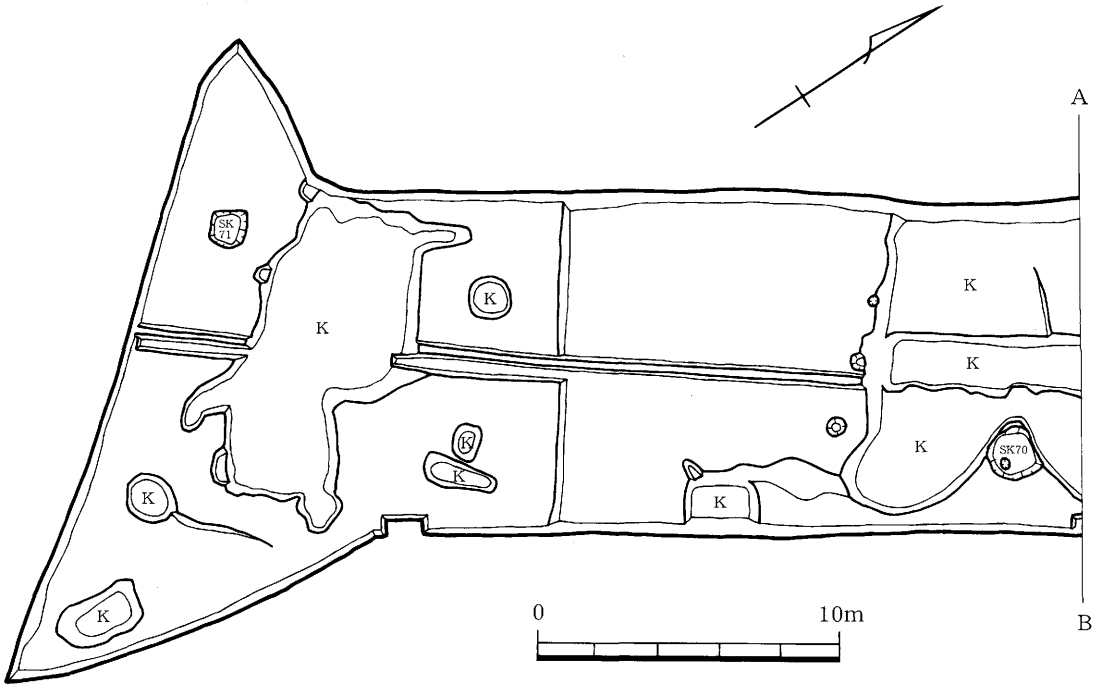


調査地区設定模式図

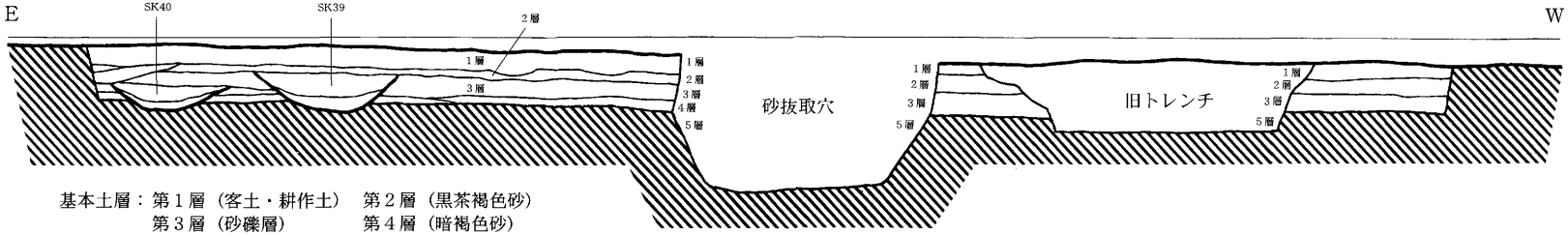


遺跡全体図（北半）
（S ＝ 1 / 250）

SKは土壙（数字のみのものも含）
Kは撹乱



遺跡全体図（南半）
(S = 1 / 250)



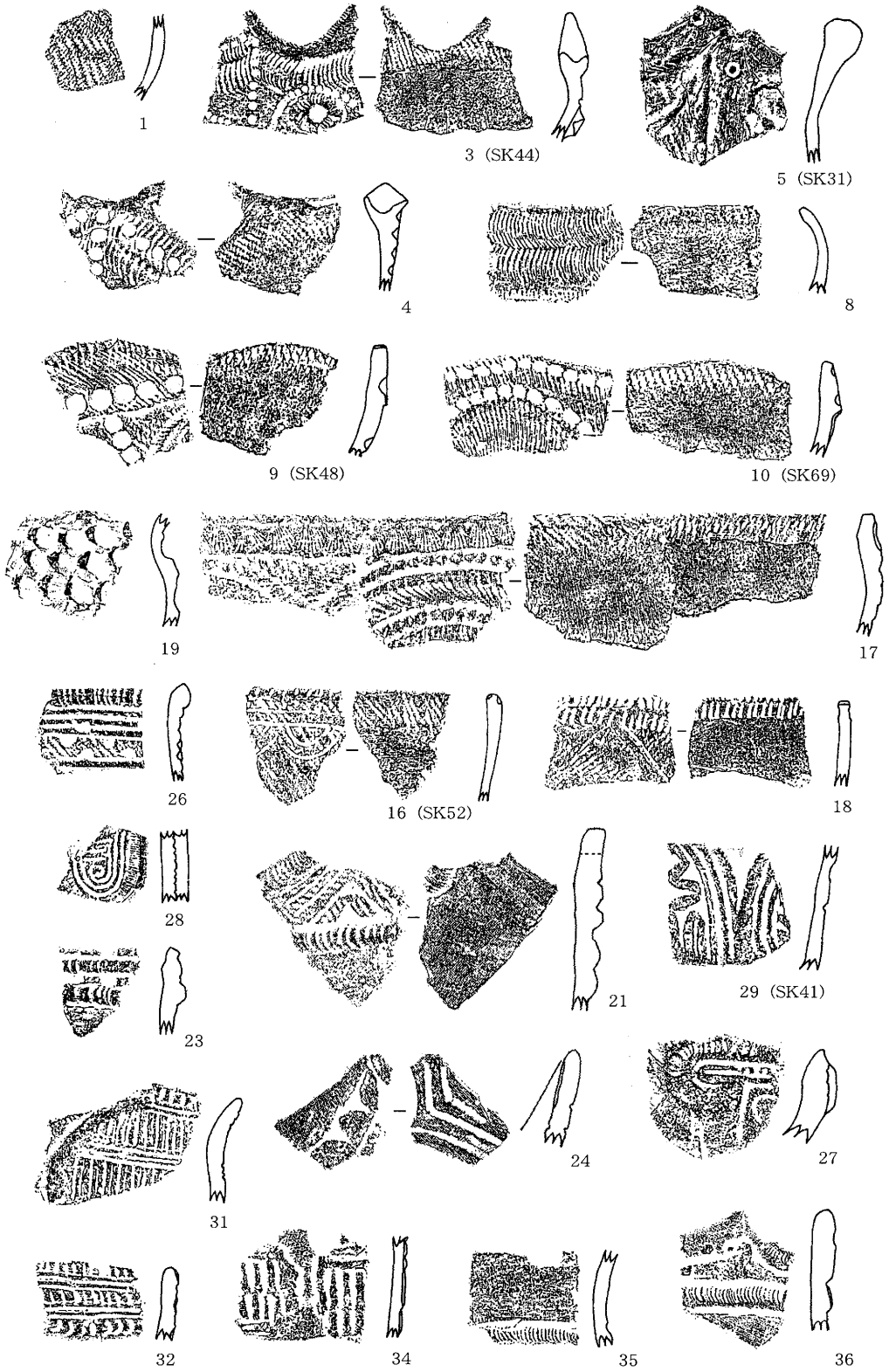
基本土層：第１層（客土・耕作土）　第２層（黒茶褐色砂）
第３層（砂礫層）　第４層（暗褐色砂）
第５層（灰褐色砂）

２区南壁土層図

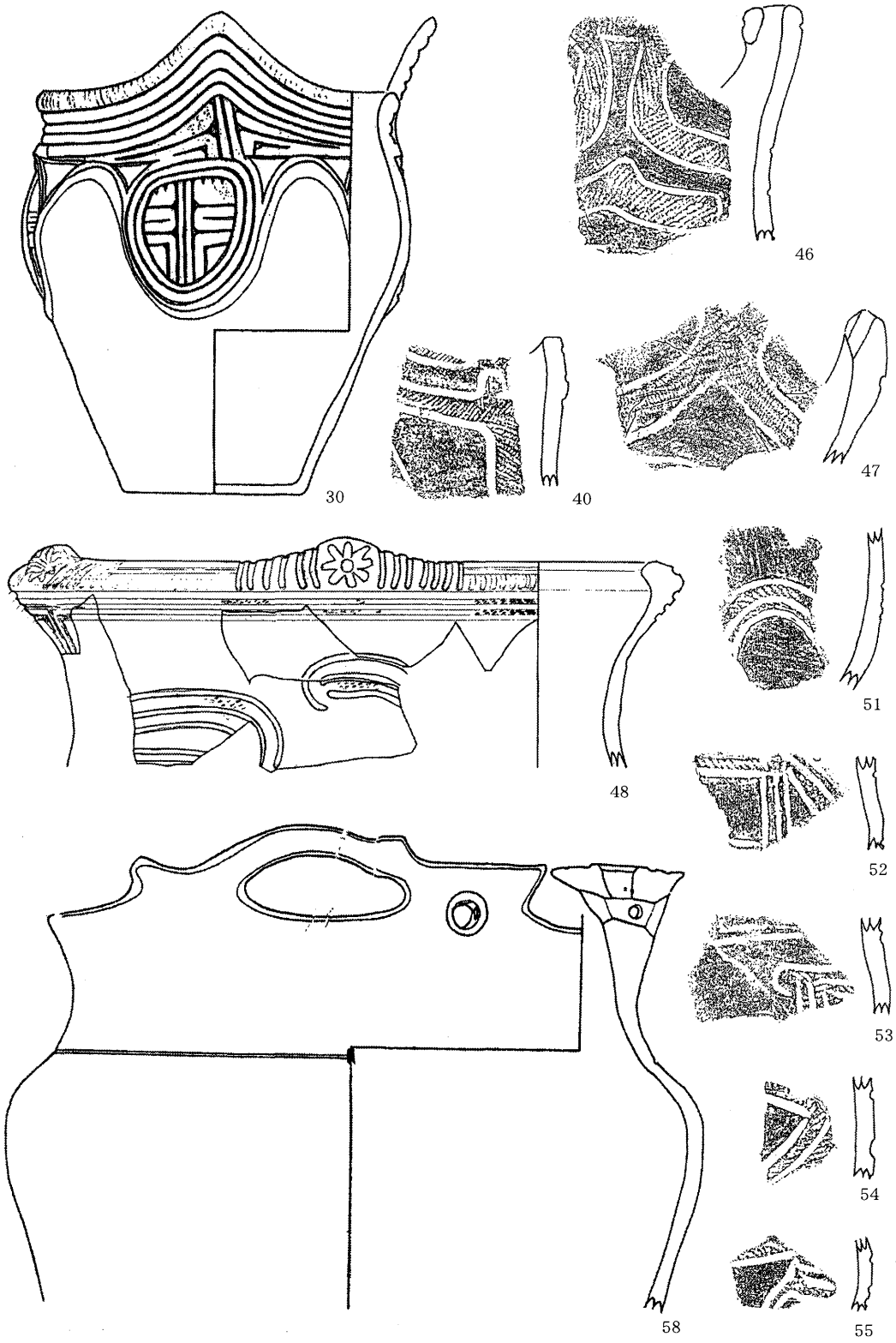
0　10m

図3

図 4

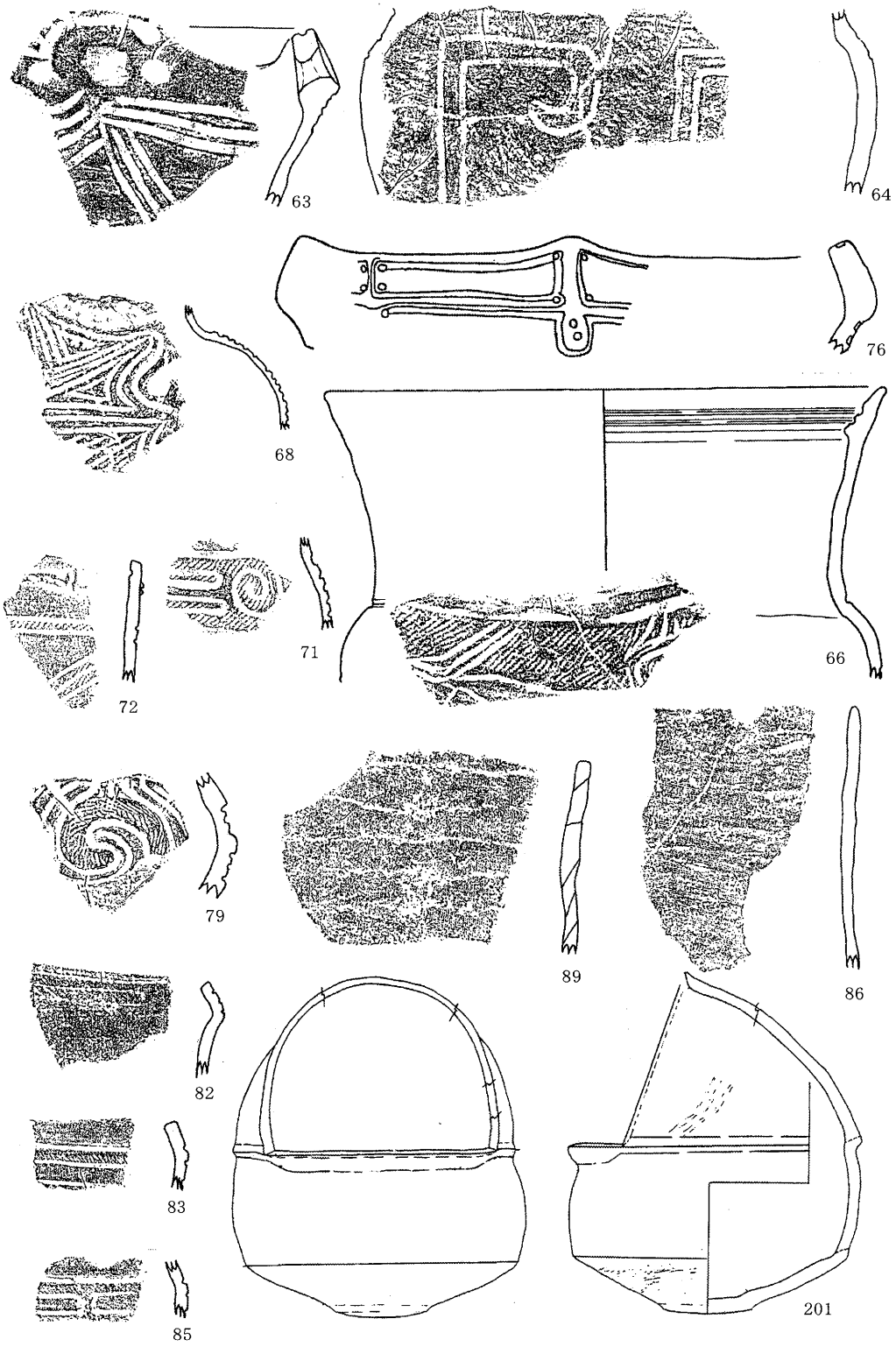


出土遺物（拓本図 = 1/2）

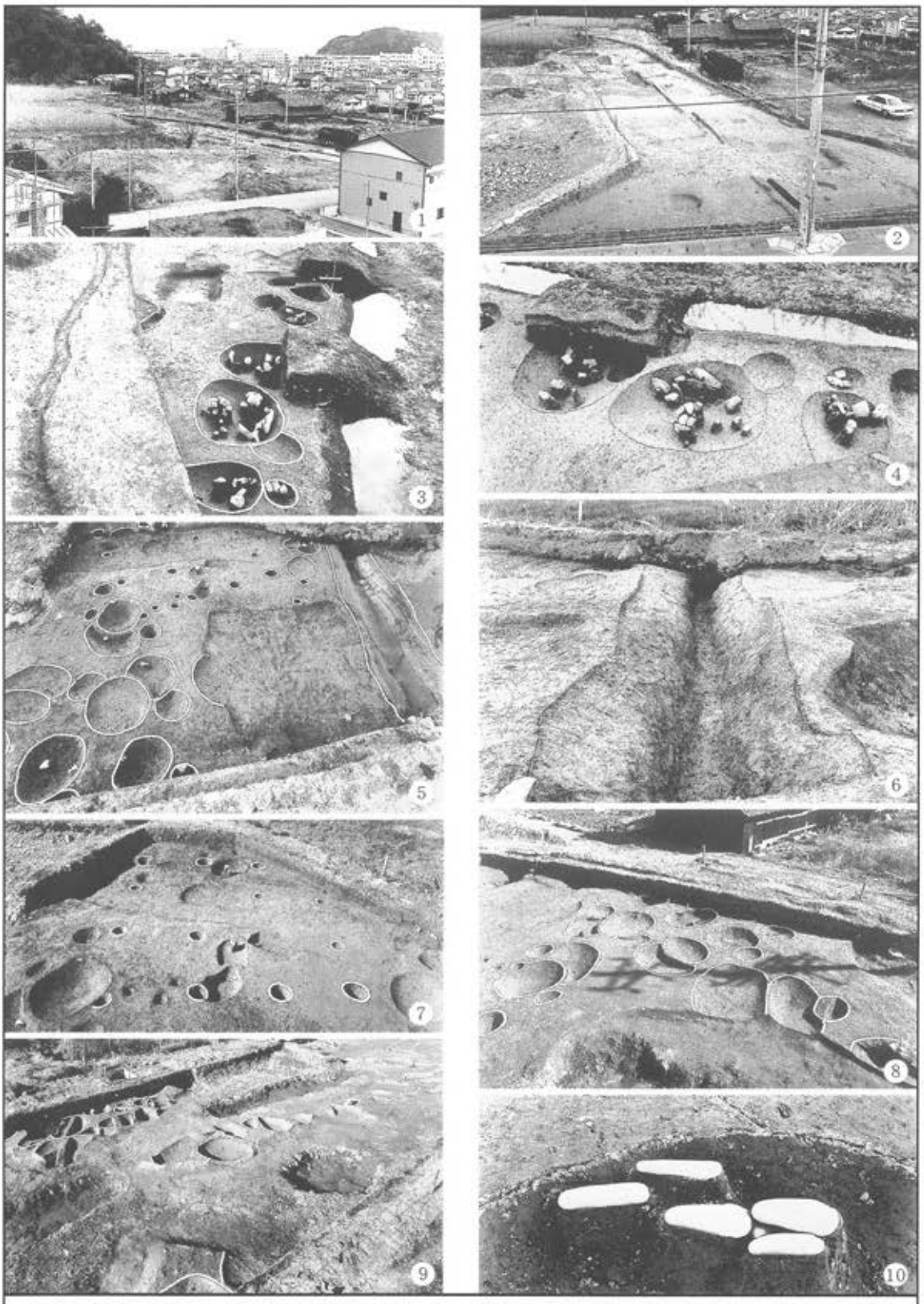


出土遺物（実測図 = 1/4　拓本図 = 1/2）

図 6



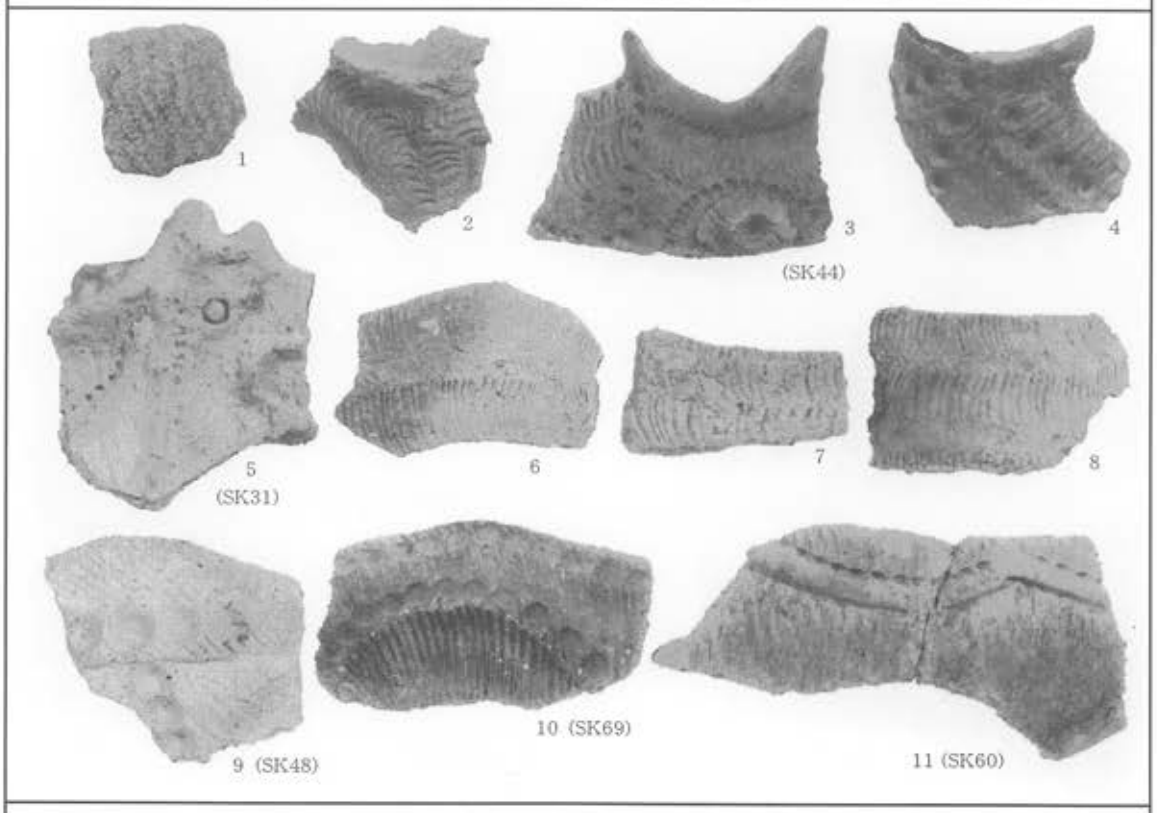
出土遺物（実測図 = 1/4　拓本図 = 1/2）



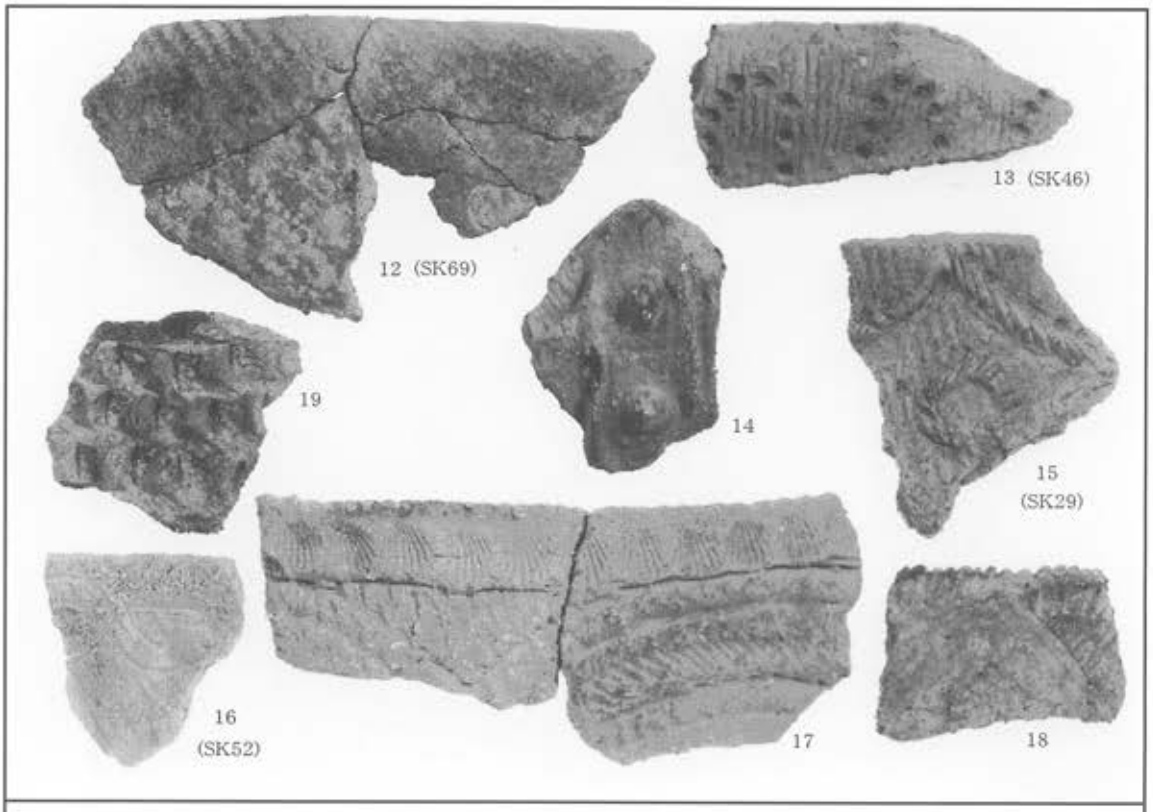
1.調査区遠景（西から）　2.調査区全景（南西から）　3.1区全景（北東から）　4.1区土壙群（南東から）　5.2区全景（南東から）
6.SD-01（南東から）　7.SB-01（南東から）　8.2区土壙群（南西から）　9.3区全景（南から）　10.SK-64石斧出土状況（北西から）

図版 2

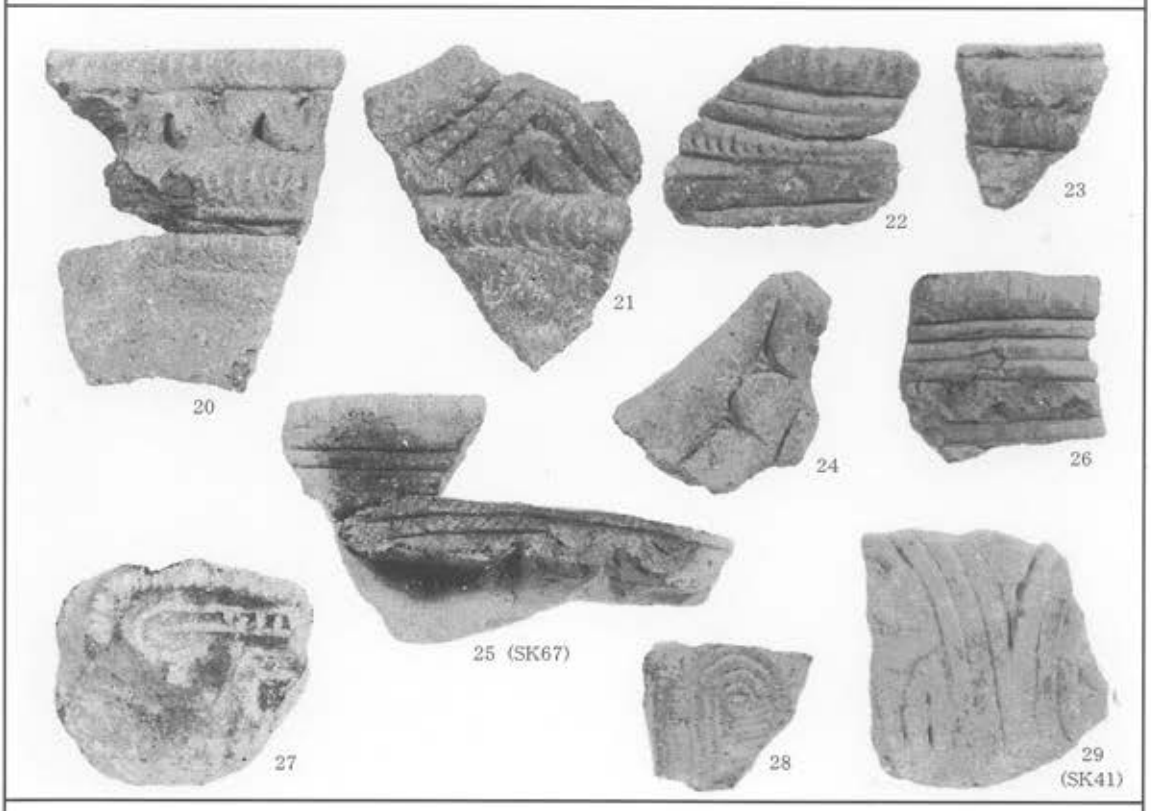
30.縄文土器深鉢（中期）　48.縄文土器深鉢（後期）　69.縄文土器注口（後期）



縄文土器（前期末から中期）

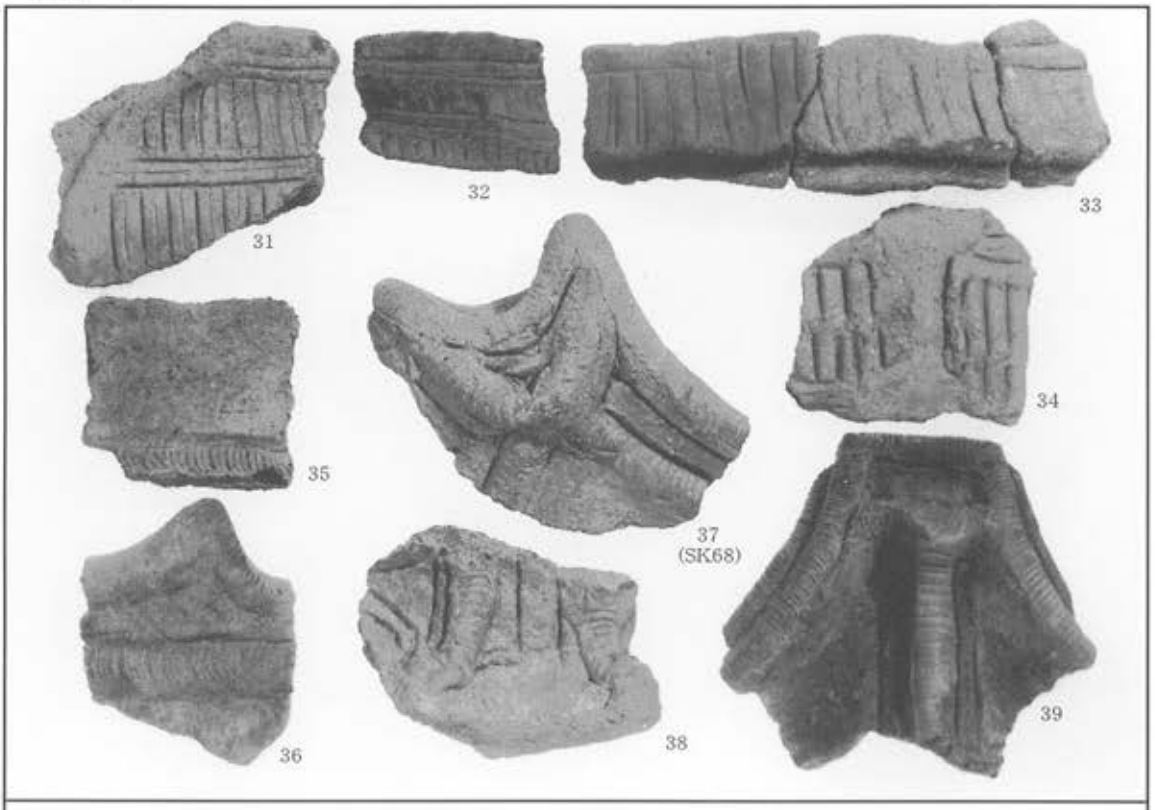


縄 文 土 器 （ 中 期 ）

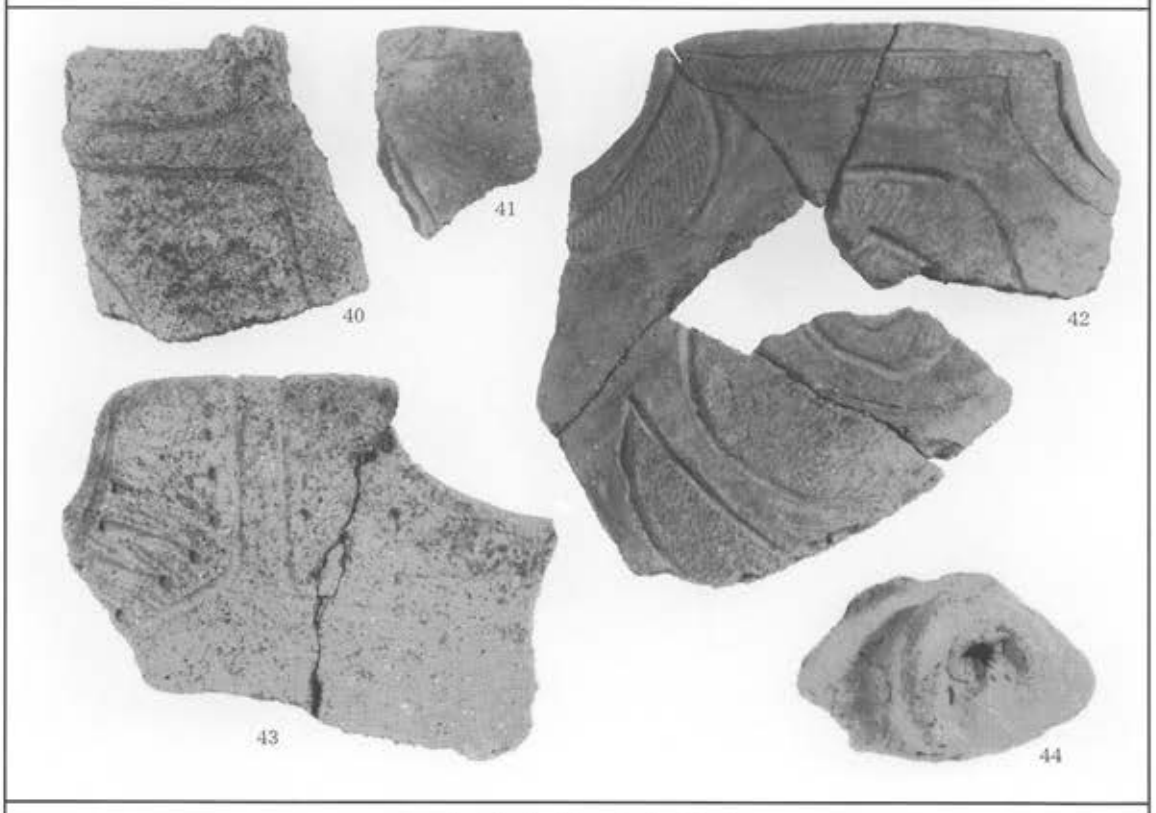


縄 文 土 器 （ 中 期 ）

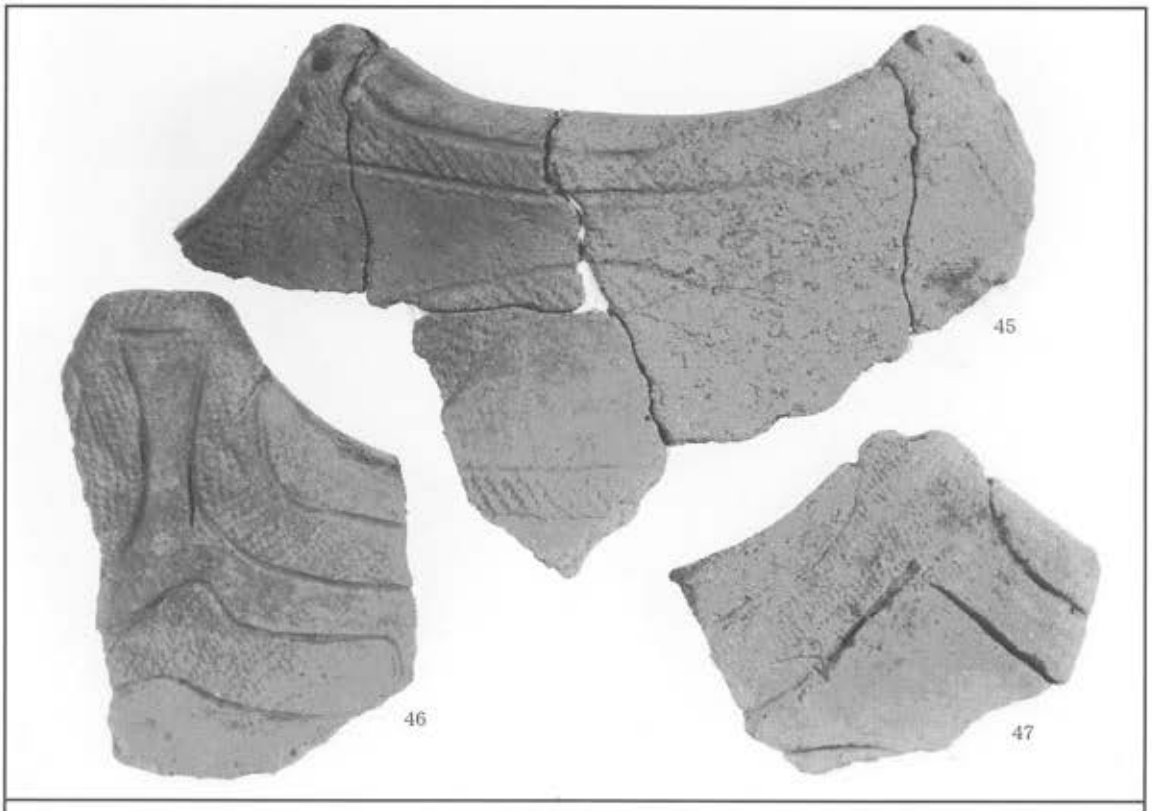
図版 4



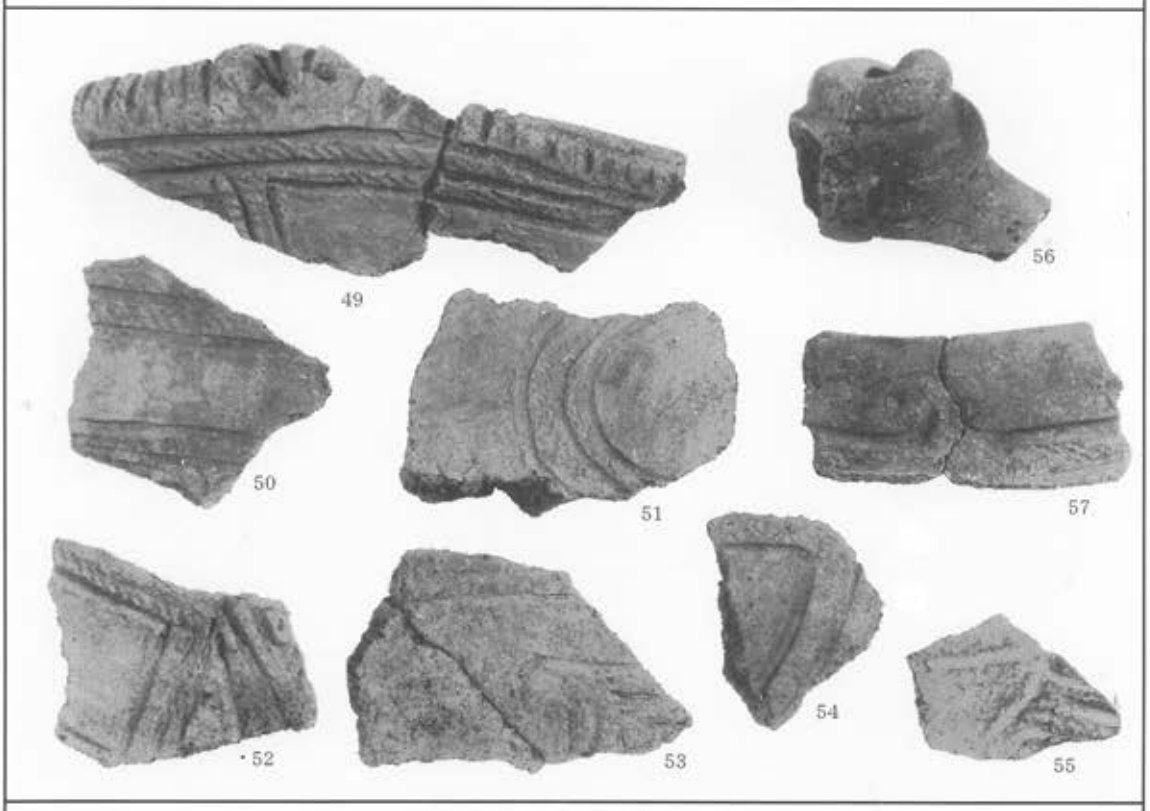
縄 文 土 器 （ 中 期 ）



縄 文 土 器 （ 後 期 ）

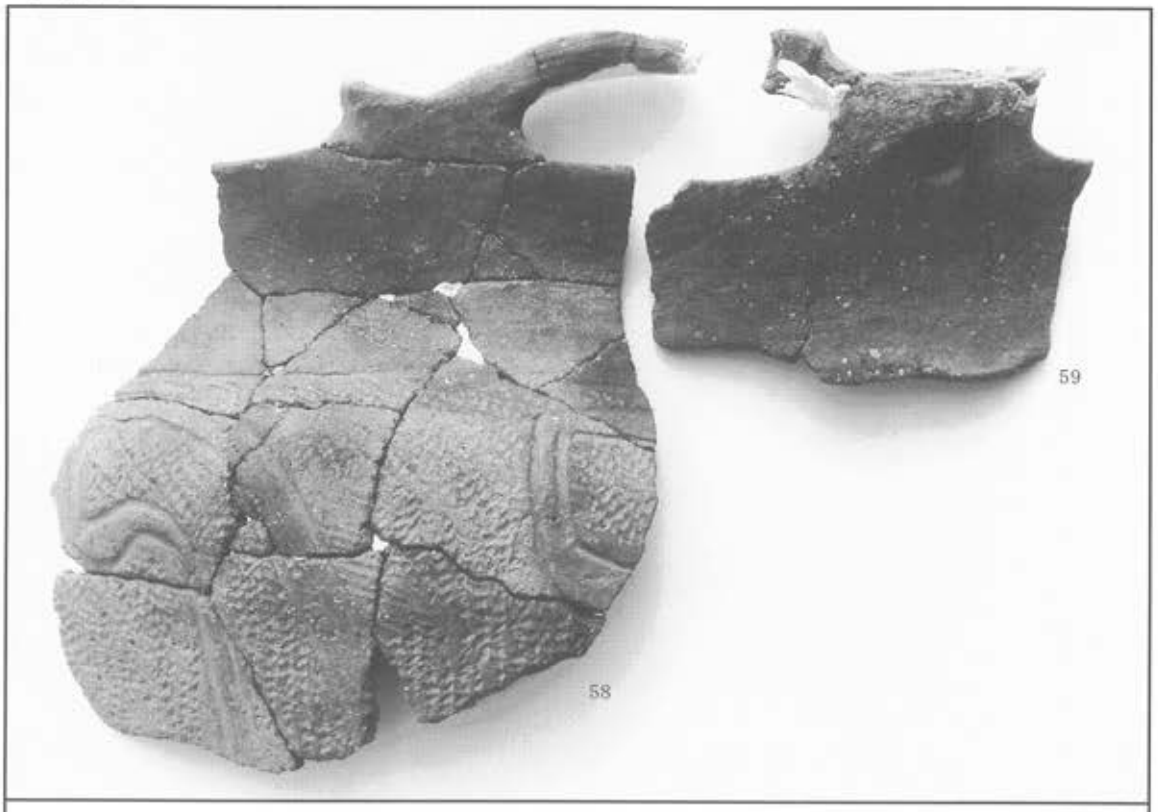


縄 文 土 器 （ 後 期 ）

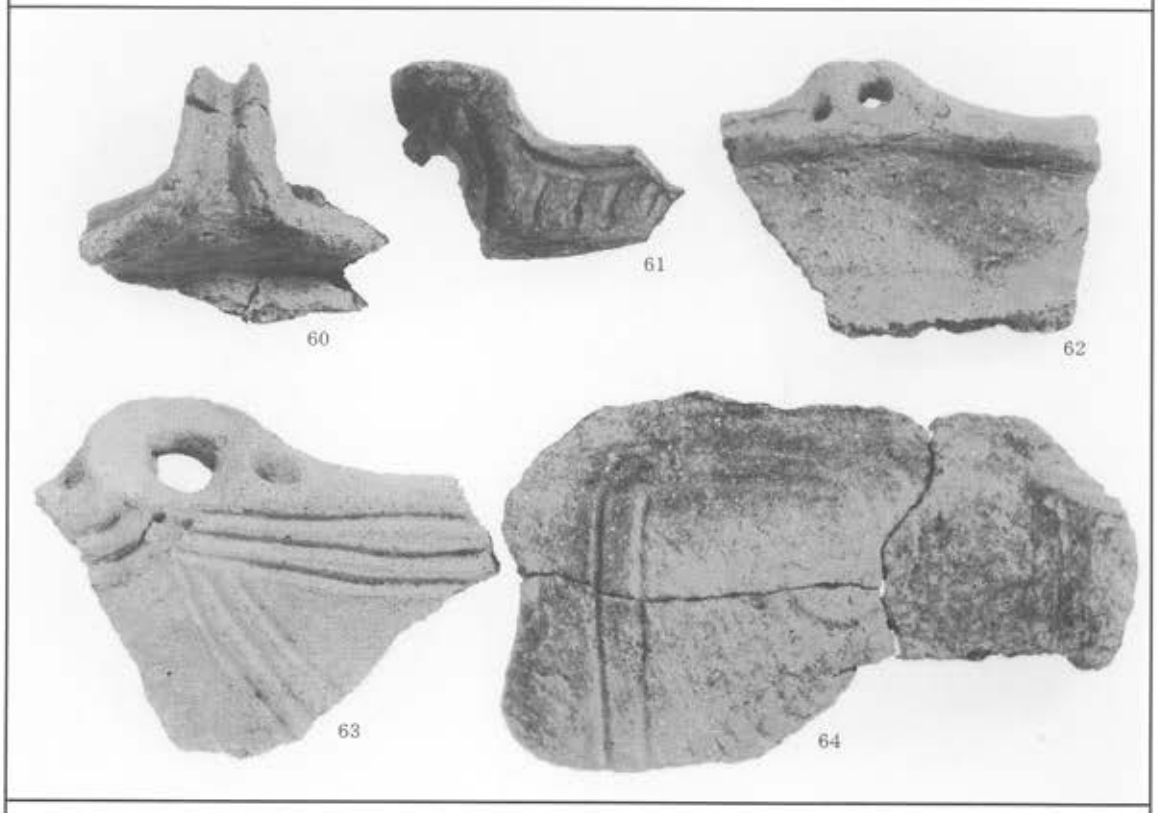


縄 文 土 器 （ 後 期 ）

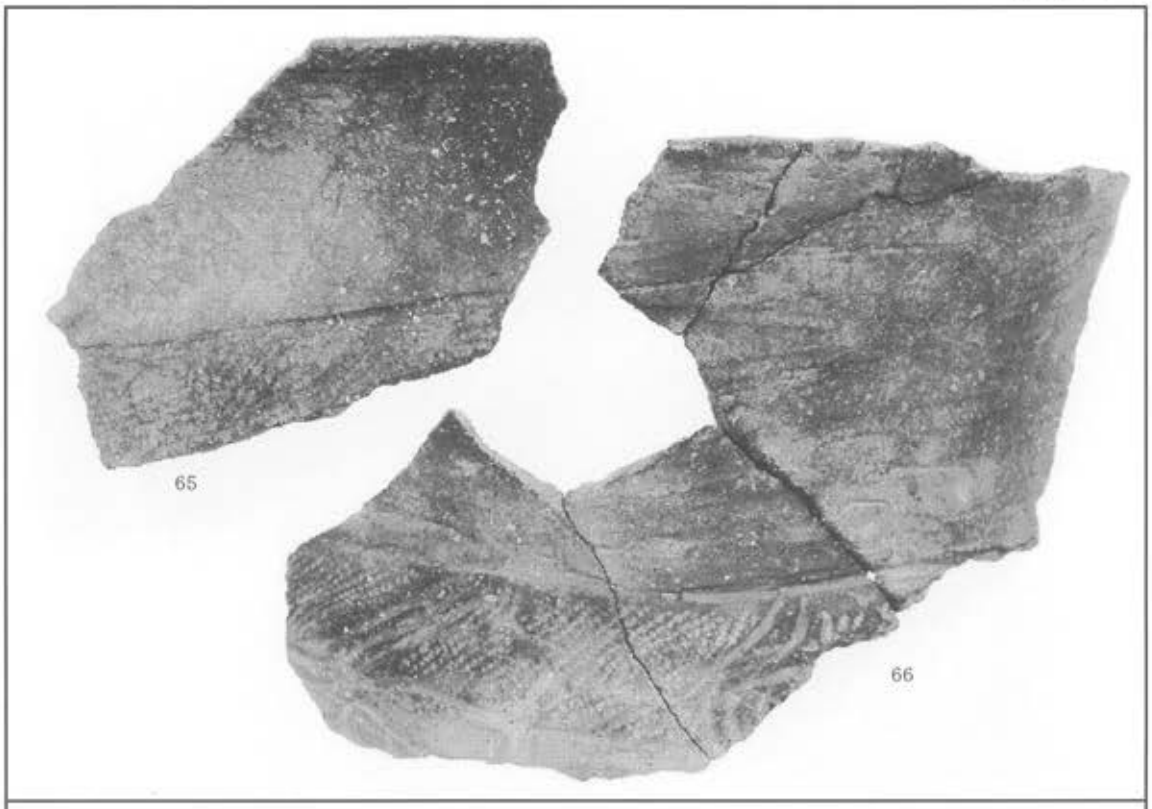
図版 6



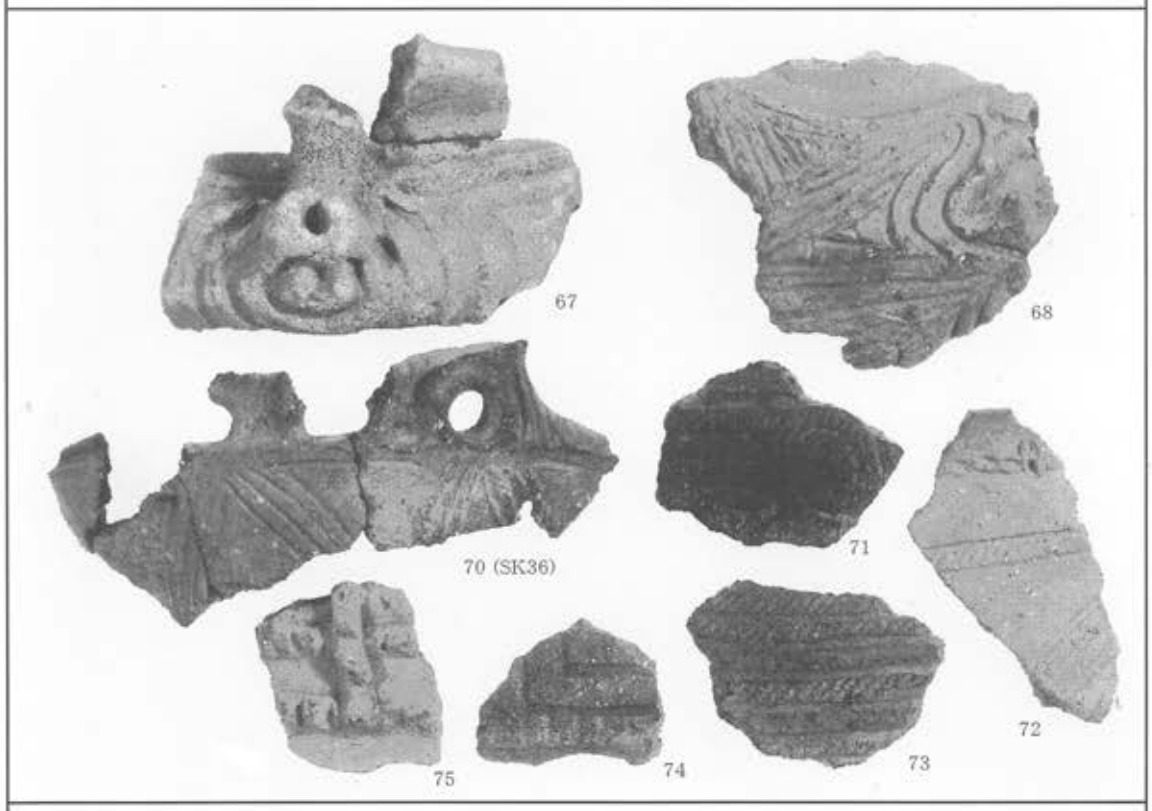
縄 文 土 器 （ 後 期 ）



縄 文 土 器 （ 後 期 ）

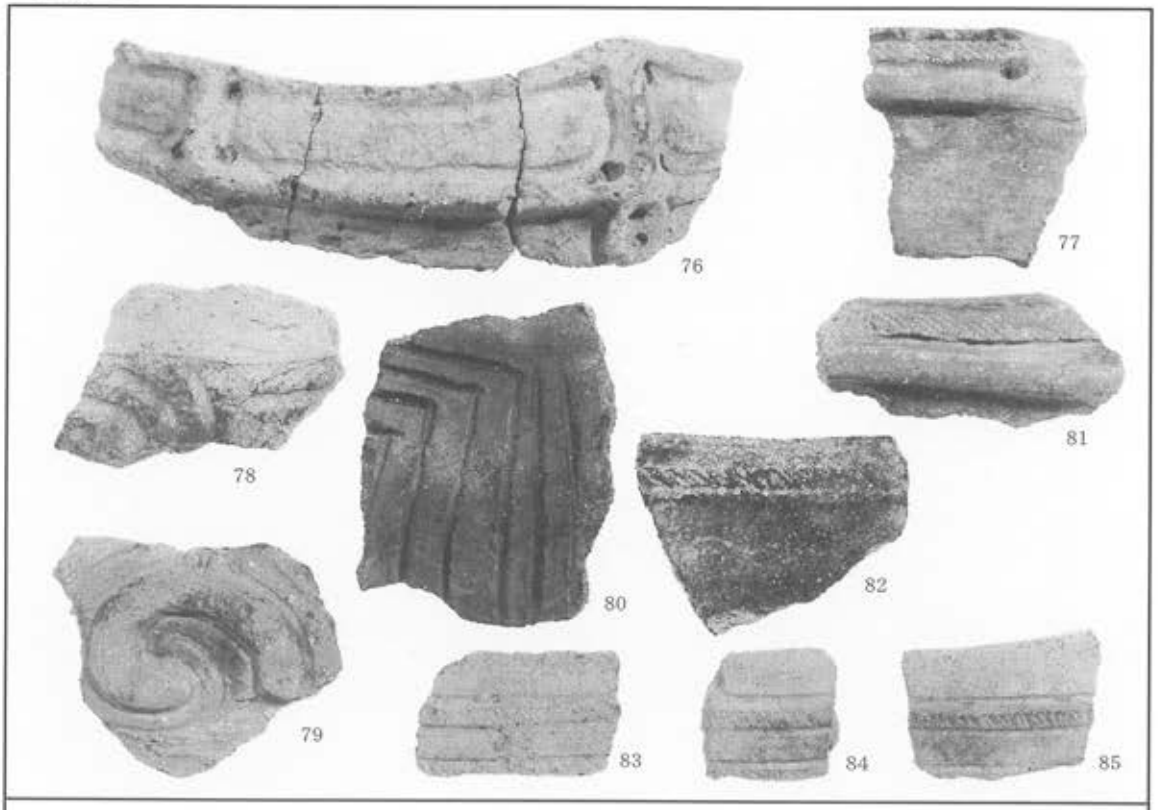


縄 文 土 器 （ 後 期 ）

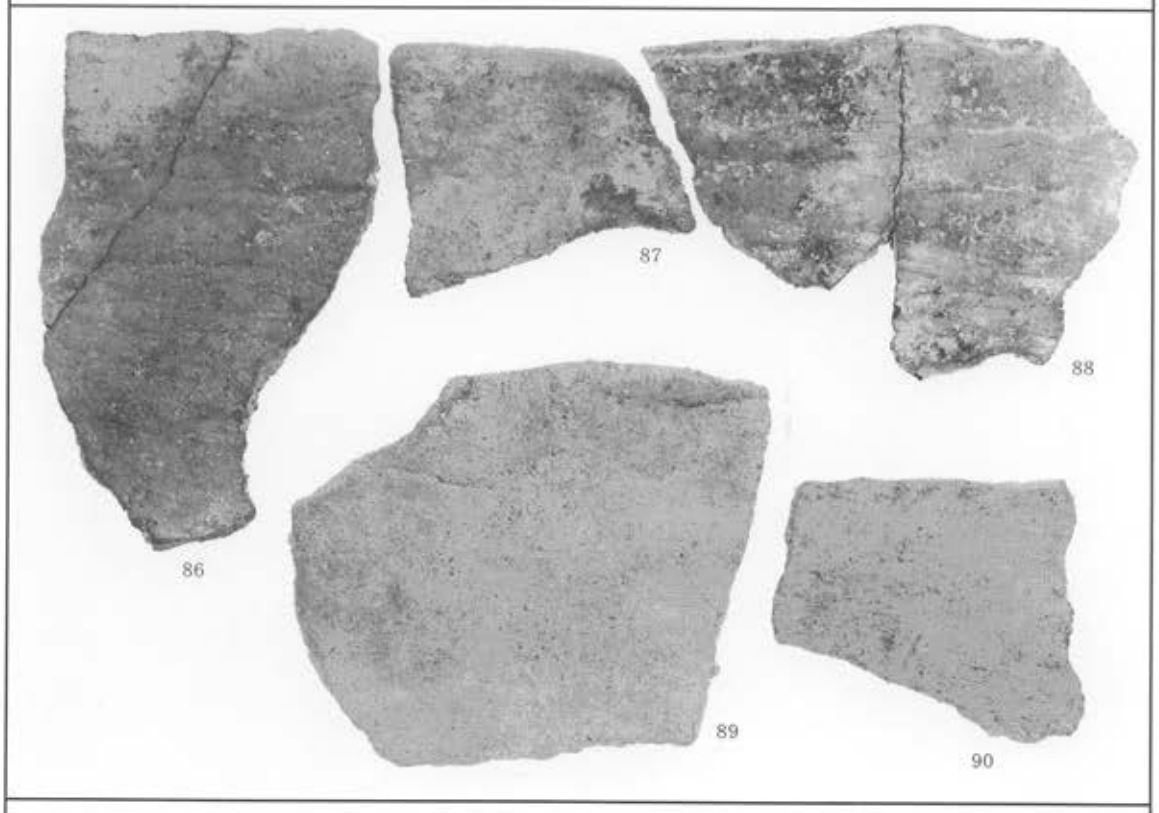


縄 文 土 器 （ 後 期 ）

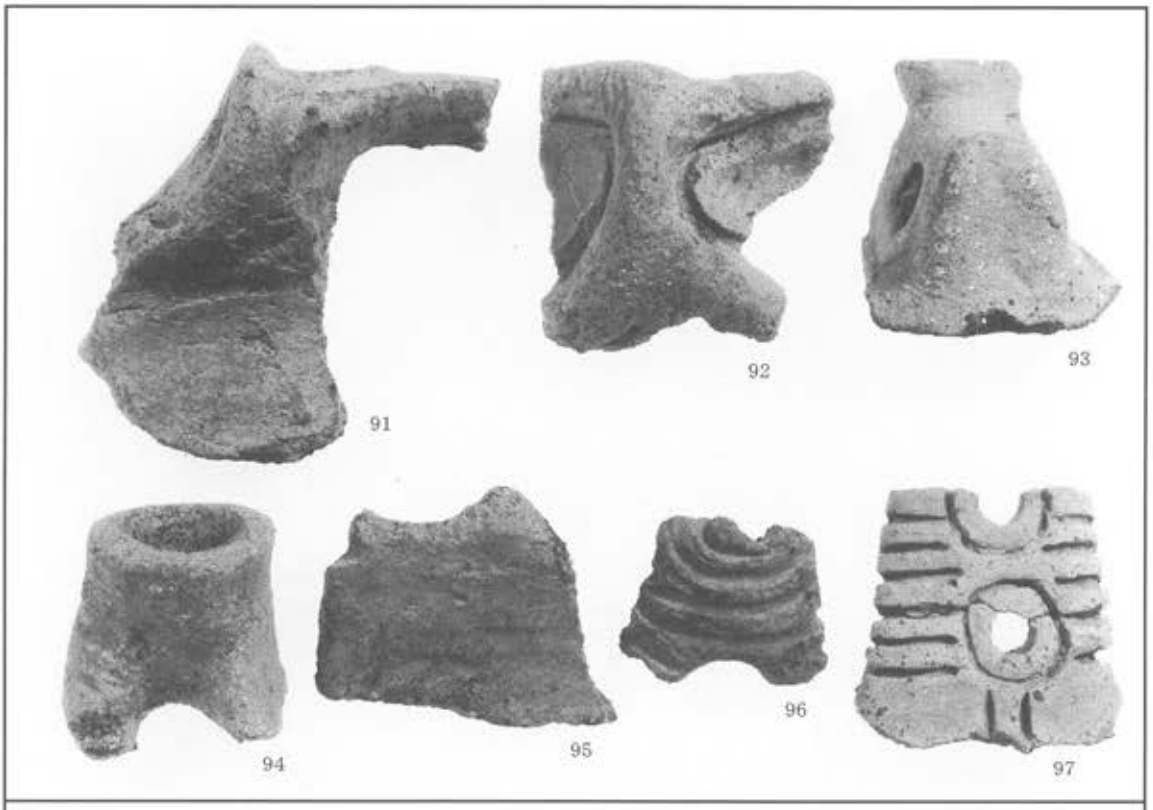
図版 8



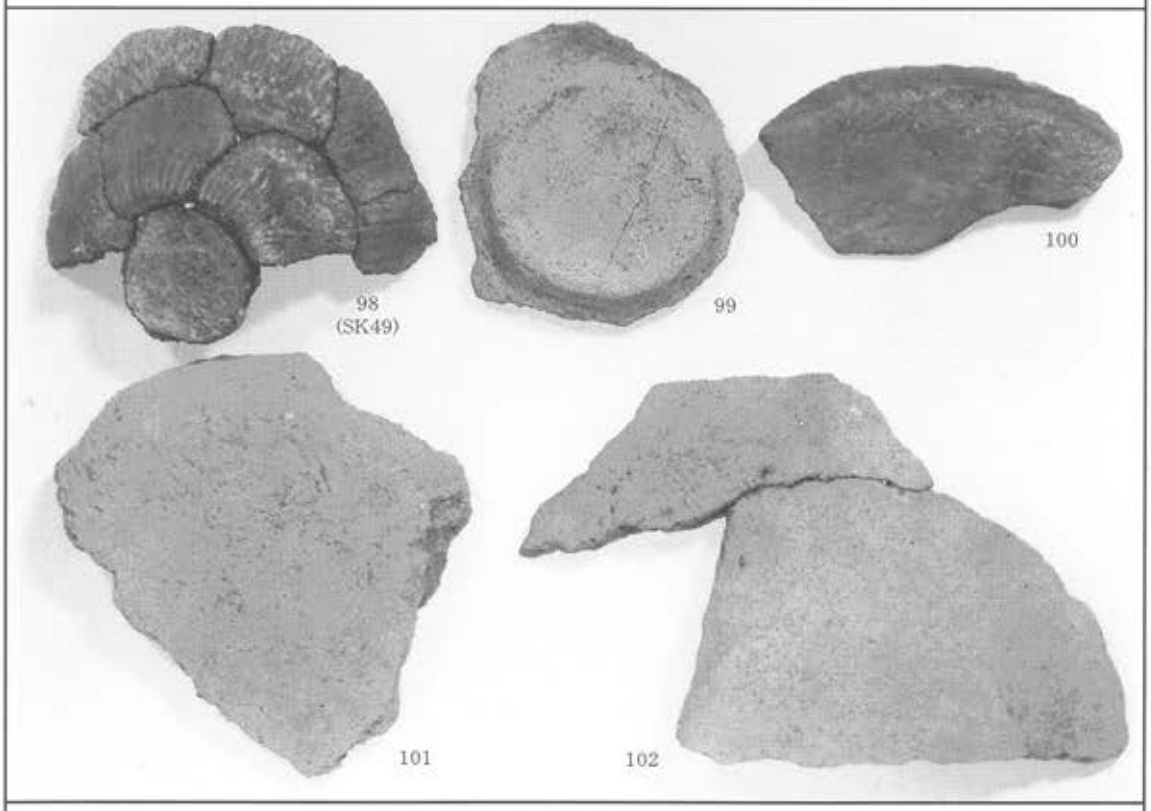
縄 文 土 器 （ 後 期 ）



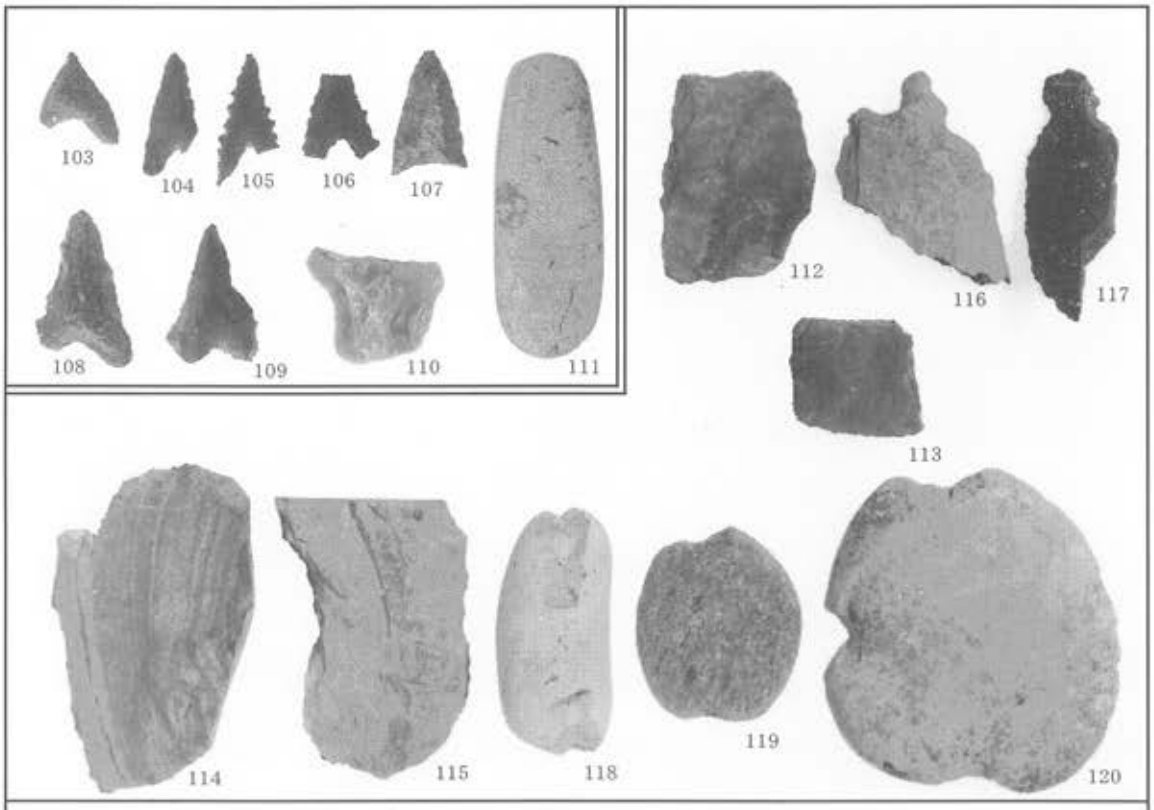
縄 文 土 器 （ 後 期 ）



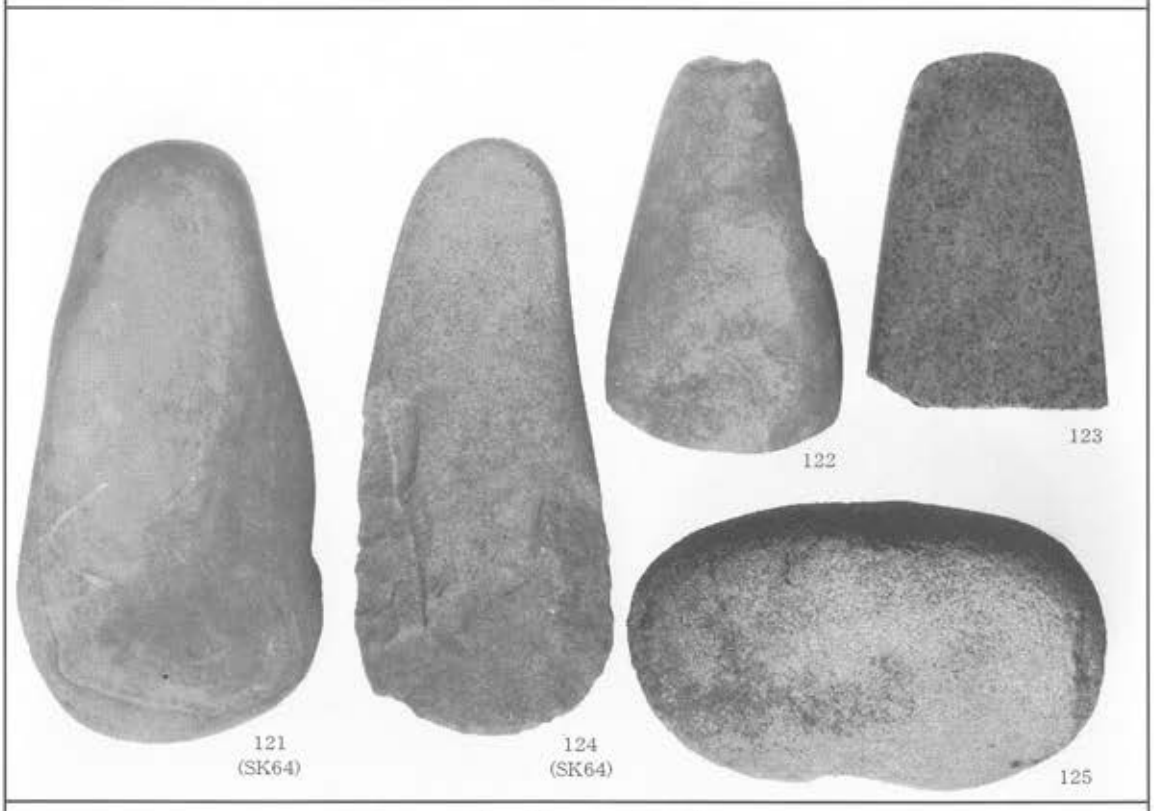
縄文土器ほか（後期）



縄文土器底部（中～後期）



石鏃・石槍・石斧（ミニチュワ）・削器・石匙・石錘



石　斧　・　敲　石

大水崎遺跡

―― 串本町総合運動公園に伴う発掘調査概報 ――

1991年3月発行

編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷　有限会社　土屋総合印刷